

2021年度早稲田大学リサーチアワード受賞者の件

早稲田大学リサーチアワード審査委員会での審査の結果、早稲田大学リサーチアワードの受賞者について、以下のとおりの審査結果となりましたので、ご報告いたします。

(資格・箇所名は2021.10.1時点)

早稲田大学リサーチアワード（大型研究プロジェクト推進）※五十音順

氏 名	資 格（所属箇所名）	研究費受入箇所名
大島 登志男	教授（理工学術院）	理工学術院
齋藤 潔	教授（理工学術院）	総合研究機構
戸川 望	教授（理工学術院）	理工学術院総合研究所
所 千晴	教授（理工学術院）	理工学術院総合研究所

早稲田大学リサーチアワード（国際研究発信力）※五十音順

氏 名	資 格（所属箇所名）
石田 京子	教授（法学学術院）
大久保 將史	教授（理工学術院）
コアド アレックス	教授（商学学術院）
セドン ジャック	准教授（テニュアトラック） （政治経済学術院）
田原 優	准教授（任期付）（理工学術院）
浜田 道昭	教授（理工学術院）
ピタルク パウ	准教授（文学学術院）

※早稲田大学リサーチアワード（国際研究発信力）の各受賞者の推薦理由は、次ページ以降のとおり。

参考

氏名	資格 (所属箇所名)	推薦理由
石田 京子	教授 (法学学術院)	<p>石田氏は、司法制度改革、ADR、夫婦同姓等、日本において現実に生起する社会課題を法的な視点から実証的に考察する研究を積み重ね、その成果をまさに時宜に適う形で国内外に向けて発信する努力を続けている。海外ジャーナルへの投稿が稀な我が国の法学分野において、石田氏は、あえてこれに継続して取り組むほか、各種の国際共同研究で中心的な役割を担う等、その国際的な発進力の高さによって見込まれる学術的・社会的な波及効果は大きく、今後の一層の活躍が期待される。また、テーマに関して、規範的な主張のみを展開させるより、むしろ各種の統計やインタビューという量的・質的なデータを分析する手法をとることで、目に見えない社会意識を目に見える形で議論可能にするとともに、特に国際社会に情報発信するにあたり、日本社会におけるその問題の実像を描き出すことに成功しており、研究の優れた点として、その創造性を評価することもできる。</p>
大久保 將史	教授 (理工学術院)	<p>大久保氏は、蓄電池の材料化学分野において、新材料創製から電極特性評価、物性評価や計算化学的手法、放射光を初めとした先端計測などに関する造詣をもとに、世界を先導する優れた成果を挙げている。同氏の最近5年間の研究における主な成果の一つに、遷移金属炭化物に関する新しいカテゴリーの材料の提案とその反応機構解明が挙げられる。これは、今後期待される蓄電池材料の多様化に資するところが極めて大きいと考えられる。また、リチウムイオン電池などの正極反応に関して、酸素イオンの興味あるレドックス反応を明らかにし、当該分野の基礎学術において重要な示唆を与えている。同氏は国内外の大学や研究機関との共同研究を積極的に推進しており、それらの成果は数多くの一流誌に発表されている。国際会議などを通じた海外研究者の招聘や、セッションオーガナイザなどとしての活動も活発であり、国際的ネットワークの形成とコミュニティの構築に貢献している。以上の点から、大久保氏は今回の受賞に相応しく、今後も当該分野における多大の寄与が期待できる。</p>

<p>コアド アレックス</p>	<p>教授 (商学学院)</p>	<p>Coad 氏の研究業績は、企業のマイクロデータを用いた、企業成長・アントレプレナーシップ・イノベーションに関する実証研究である。近年、企業成長に関する研究では分析用データの質に関する激しい競争が行われているが、同氏は多彩なデータを用いた堅実な実証研究を積み重ねている。その成果は、Financial Times Top 50 Journals に選ばれている Entrepreneurship Theory and Practice や Research Policy を始め、各分野を代表する海外ジャーナルに数多く刊行されている。当該分野でこれだけのハイペースで論文を生産している研究者は国際的にも少ない。また Research Policy や Small Business Economics のエディターの経験も有するなど、同氏の国際プレゼンスはきわめて高い。産業組織論では伝統的に参入やイノベーションの重要性が論じられてきたが、同氏の研究は参入後に効果的なイノベーションを実現していく必要があるとの視点から、スタートアップ企業の成長や変化、さらには産業のダイナミクスの重要性について有益な知見を提供している。</p>
<p>セドン ジャック</p>	<p>准教授 (テニュアトラック) (政治経済学院)</p>	<p>Jack Seddon's work is highly innovative in looking at the origin, performance and regulation of financial and capital markets. Seddon has carried out exciting research on monetary regimes and their development over time. It is of first-rate quality combining rational choice and historical institutionalism. Seddon's work is interesting for taking a historical institutional approach – for example, examining and explaining the distinct historical pathways taken by different monetary regimes. Unlike many who work in this tradition, however, Seddon theorizes and explains the pathways (e.g., cooptation versus stratification) and their consequences. In doing so, he works at both micro and macro levels.</p> <p>Since he received his doctorate in 2015, Seddon has published in the very best journals in his field: Perspectives on Politics, International Studies Quarterly (ISQ), and Review of International Political Economy. He also has a good number of chapters in edited volumes and in Handbooks.</p> <p>Seddon's work is distinguished by his asking big questions and not shying away from difficult explanations. Given the journals in which he has published, one can be sure that the impact of his academic work will be strong in the future.</p>

<p>田原 優</p>	<p>准教授（任期付） （理工学術院）</p>	<p>田原氏は、概日リズムの視点から疾患や健康を科学する新たな学問分野-“時間栄養学”を立ち上げ、数々の独創的な研究を展開している。具体的には、慢性腎臓病、腸内細菌叢、肝機能と概日リズムとの関連性に関する研究で、ハイインパクトの国際一流紙に研究成果を発表し、引用数からも世界的な評価を受けている。この国際的な評価を受けて Nature Reviews Gastroenterology and Hepatology 誌に総説を執筆しており、“時間栄養学”の波及にも務めている。さらに、時間栄養学関連のシンポジウムでのオーガナイザーを務めたり、自ら中心となって国際的な研究ネットワークを形成し、その代表者として研究費を獲得するなど、氏の国際発信力は内外ともに非常に高く評価されている。以上のように、若手パイオニアとして時間栄養学の確立と波及に大きな貢献を果たしてきた。今後も、さらに大きなインパクトを与える研究成果を発信し、革新的な食品や医薬品の開発、あるいは新たなライフスタイルの提唱などの広範な分野で社会還元を実現するだろう。</p>
<p>浜田 道昭</p>	<p>教授 （理工学術院）</p>	<p>浜田氏は、バイオインフォマティクス分野、特に長鎖ノンコーディングRNA (lncRNA) の情報解析分野で顕著な業績を誇る。タンパク質がコーディングされないノンコーディングRNAの中でも約200鎖以上の塩基からなる lncRNA は、生体内の多用なプロセスに関与しており、その貢献は創薬・医療分野を中心に国際的な波及効果が極めて高い。特に、同氏が開発した世界最高レベルのRNA-RNA相互作用予測ツールRiblastは、lncRNAとタンパク質コーディングRNAとの相互作用の予測を可能とし、実験生物学的なアプローチとの融合により世界ではじめて腎細胞癌の薬剤感受性の分子機構を解明するなど、先導的な成果を数多くあげてきている。同氏は、Nucleic Acids Research、Oncogene、Bioinformaticsなどの主要な国際論文誌に多数の論文を発表しているだけでなく、トップクラスの国際会議GIW、WABI、BIBMなどでプログラム委員を複数回務めている。さらに、国内外において病院との連携を積極的に進めており、共同研究論文の発表へと結びついている。このように、同氏の研究アプローチ方法は、世界的にも優位性・独創性が高く、当該分野における世界有数の研究者である。</p>

ピタルク パウ	准教授 (文学学術院)	<p>Professor Pitarch has been conducting original and in-depth research that is outstanding in quality and quantity in the field of modern Japanese literature. His academic papers and conference presentations in the last five years, mainly focused on Ryunosuke Akutagawa, Haruo Sato and Jun'ichiro Tanizaki, have a high degree of originality, and have advanced the field of modern Japanese literary studies in significant ways. He has also contributed to the area with translations of academic papers. It is also important that he is one of the few advanced scholars of modern Japan who is active in Spanish as well as English. His wide range of research activities is surely an advantage for his international network, and should be commended as an important step in the globalization of Japanese studies. Especially, the article on Tanizaki published in Spanish significantly increases the societal impact of Professor Pitarch's research. His research outcomes and translations have been read widely, which is reflected by the high number of citations he has received. As stated above, Professor Pitarch is doing innovative and first-rate research, and his use of Spanish in addition to English and Japanese, means a very important gain in his ability to broadcast his work, and to call attention to Japanese literature in a much wider international forum than is typical for most international scholars.</p>
------------	----------------	--